

第 2 回 JICA-JISNAS フォーラム

「農業セクターにおける国際協力とマーケティングの重要性」概要

冒頭、熊代輝義 JICA 農村開発部部長より関係者への挨拶及びフォーラムの趣旨につき説明があった後、岩谷寛 JICA 農村開発部次長、相川次郎 JICA 国際協力専門員、板垣啓四郎 東京農業大学教授から話題提供がなされた。

岩谷次長からは、「農業・農村の発展状況に応じた適切なアプローチ」と題し、JICA における農業・農村開発の目的を①食料の安定供給、②農村貧困削減と経済成長、③農業の多面的機能の 3 つに整理した上で、これまでの JICA の協力は生産増や生産性向上や農村開発分野が大半であったのに対し、今後は農業関連産業の振興まで含めバリュー・チェーン全体を見た協力を図る必要があることが報告された。

相川国際協力専門員からは、「小規模園芸農民の所得向上を目指す SHEP (Smallholder Horticulture Empowerment Project) アプローチ」と題して、SHEP の紹介がなされた。SHEP を通じて、これまでの「作ってから売る」から「売るために作る」へと農家のマインドを変革し、種を植える前から、販売価格を予測、確保しておいた売り先に売る、という風が変わったことが報告された。今後の課題として、TICAD5 における日本政府のアフリカ広域化構想を受けて、他国からも導入の希望が有る中で各国の状況に合わせた改良が必要であり、今後 SHEP のオリジナリティにつき詳細に分析し説明する必要があるとの報告がなされた。

板垣教授からは、「農産物流通の分析視点と国際協力のあり方」と題した話題提供がなされた。物的生産性から価値生産性向上へとパラダイム転換が必要であるとし、農業者の所得向上を目的にして、農業者にとってどのような市場化・流通とのかかわり方が望ましいのか、またそのためにどのような市場化・流通の在り方が望ましいのか、また、望ましい市場化・流通を実現していくために必要な国際協力の在り方について、①農業を主体とする諸国、②都市化が進みつつある諸国、③都市化が進んだ諸国、の 3 つの発展段階に分類し、報告がなされた。

続いて実施された総合討論には、話題提供者の 3 名に下渡敏治日本大学生物資源科学部教授、水野正己日本大学生物資源科学部国際地域開発学科教授が加わり、フロアーからも多くの質問が出る等活発な討論がなされた。

モデレーターを務めた伊藤香純名古屋大学農学国際教育協力研究センター准教授からは、農業分野でマーケティングの視点は必要不可欠であり、特に農民の所得向上を目的としてプロジェクト実施する場合には必須な視点であること、また、上手くやれば雇用面等多大に貢献できるが、どのようにやれば上手く機能するのかという点が重要である、とまとめた上で、以下の課題が整理されたとして、今後 JICA-JISNAS で継続的に議論を深めていき

たいと話があった。

- ・ 民間との関係で ODA の活用。民間と ODA のデマケを明確にしていく必要がある。
- ・ 所得向上であれば他に方法がある。目的を踏まえやっていく必要がある。
- ・ 発展段階に応じた支援だけでなく、国の中でも格差がある。作物によって異なる、市場規模によって異なる場合もある。これらをモデル化していく必要性がある。
- ・ 市場だけではなく、ODA を活用し制度的なアプローチも同時に進めていく必要である。
- ・ 伝統的システムをうまく活用していくという視点が必要である。
- ・ 対象からもれる小農へのサポート、インパクトも同時に考えていく必要がある。

なお、フォーラムのテーマ設定及び開催された場所の都合上、多くの開発コンサルタント関係者が出席されており、今後も継続して東京で同様趣旨のフォーラムを開催してほしいという声が会場から多く寄せられた。

最後に、田中耕司 JISNAS 運営委員長（京都大学学術研究支援室室長）から、多数の出席に感謝しつつ、今回のテーマに関する議論が一回で終わることなく、今後もこのような機会を作っていきたいとの言葉があり、閉会となった。

以上